ミャンマー軍事政権の少数民族への弾圧を描くドキュメンタリー映画「ビルマ、パゴダの影で」が3月15日から、渋谷の映画館で上映される。「パゴダ」とは、寺院の仏塔のこと。仏の教えとほど遠い悲惨な人権弾圧が、仏教国ミャンマーにはある。題にはそんな世界へのメッセージが込められている。

（竹井陽平）

渋谷で来月15日公開

ミャンマーは約135の民族からなる多民族国家。1988年、民主化を求める大がかりな市民デモが起こったが、国軍がこれを鎮圧するとともに政権を掌握。その後、政治犯の拘束や少数民族への弾圧が続いている。こうした情勢は2006年、国連安保理でも公式に議題となり、昨年の反政府デモへの武力弾圧に対しては、政権を強く非難する議長声明が全会一致で採択された。

メガホンを取ったアイリーヌ・マーティー監督（49）はスイス出身。これまでも米先住民居留地でのウラン採掘、中南米のコカインビジネス、アフリカへの開発援助を巡る利権といった問題を精力的に取材。社会の腐敗を鋭くえぐり出すドキュメンタリー映画を次々と発表してきた。

軍事政権下での取材・撮影は困難を極めた。マーティー監督は観光用のPR映像を撮ると偽って潜入し、カメラを持ち込んだという。現地の人からは、取材への協力もなかなか得られなかった。政府を批判するだけで懲役刑が下される状況の下、人々の警戒心は強く、政府の役人の目に触れないよう苦心する取材の連続だった。

タイ国内、ミャンマー国境を越えたばかりの地域に、計10万人以上が暮らす難民キャンプが点在していた。「両親を撃ち殺した軍の兵士が憎い」「将来は反政府組織の兵士になりたい」。そこでは、政府の監視が及ばないとあって、大人たち、子供たちが軍事政権の非道を訴えた。

このほか、反政府ゲリラ組織の拠点に潜入、メンバーのインタビューにも成功。同じ国民同士が血で血を洗う内戦の現実を赤裸々に映した。

会場は渋谷区宇田川町の「アップリンクX」（☎6821・6821）。上映時間は午前10時30分、午後0時30分、午後2時30分、午後4時30分の1日4回。問い合わせは、同映画館へ。

少数民族迫害の ミャンマー描く

スイス人女性監督 マーティーさん

アイリーヌ・マーティー監督

「長井さんの死 無駄にしないで」

「アウン・サン・スー・チー氏は誰もが知っているが、少数民族や宗教的少数派への弾圧は知られていない」。来日したマーティー監督はインタビューで、作品に込めた思いを語った。

――出会った人々の印象は

「穏やかで我慢強い。ジャングルに隠れ住む貧しい人々から、『お客さんだから』と食料を差し出された時には、その優しさに涙が出た」

――撮影中、命の危険は

「タイ、ミャンマーの両国軍に見つからないように国境地帯のジャングルを3週間さまよった。トイレに行こうと思ったら、周囲が地雷だらけだったことも」

――昨年9月、長井健司さんが射殺された事件をどう思うか

「あれは事故ではなく処刑。私にも起こりえたことで、ひとごとには思えない」

――日本人にメッセージを

「欧米が何を言ってもミャンマーは聞く耳を持たない。が、同じアジアで有力国の日本なら影響力が違うのではないか。長井さんの死を無駄にしないためにも、声をあげてほしい」

「ビルマ、パゴダの影で」の1シーン。難民キャンプで生活する少女